

2014年度 公益財団法人交流協会 フェロシップ事業成果報告書

台湾メディアが取り上げた国民的英雄:王貞治から王建民にかけて

中華職業棒球大聯盟 CPBL

劉東洋

招聘期間(2014年6月5日～8月3日)

2014年9月

公益財団法人交流協会

【2014 年度公益財団法人交流協会フェローシップ事業成果報告書】

■研究テーマ：

台湾メディアが取り上げた国民的英雄：王貞治から王建民にかけて

■台湾プロ野球 中華職業棒球大聯盟

Chinese Professional Baseball League(CPBL)国際部 劉東洋

■招聘期間： 2014 年 6 月 5 日～ 8 月 3 日

■「旅日棒球明星（在日野球スター）」と王貞治

台湾の野球は、70年代に少年野球、中学校野球、高校野球の“三級棒球”が大盛況の時代を迎え、80年代に社会人野球（成棒）が発展する基礎となった。その80年代に入ってから、国際大会でナショナルチームの成績が台湾国民の関心を集める一方で、日本のプロ野球で活躍するいわゆる「二郭一莊呂時代」の新しい国民的英雄時代が到来した。

そもそも、台湾人選手輸出の起りは、古くは日本の植民時代に台湾代表として、甲子園に出場した嘉義農林学校の一員であり、「人間機関車」と呼ばれ、野球殿堂入りした呉昌征までさかのぼる。しかし、その後、70年代まで海外でプレーした選手はいなかった。

周知のとおり、台湾は1945年に国民党が治める中華民国に復帰した。それ以後は、1947年の228事件と白色テロによる台湾知識人の弾圧、1949年の蒋介石率いる国民党政府の台湾移転と戒厳令実施、1958年の金門島砲撃戦など重苦しい事件が続く。1971年には国際連合で中華人民共和国が常任理事国に認められたのに伴い、台湾は常任理事国の座を失うと同時に、国際連合からの脱退も余儀なくされ、国際的な孤立化が進んだ。この内外多難の時代に、台湾を治めた国民党は国威発揚のために国民的英雄を必要としたのである。野球が国威発揚の手段と見なされたこの時代に、ナショナルチームの選手は代表の一員として国民の声援を浴びながら、「为国争光（国の栄光のために勝つ）」の使命を強いられた。当時はプロ野球に対する認識もなければ、「金のために野球をやるのは不浄だ」というムードも強く、ナショナルチームのユニフォームを着て、国際大会で良い成績を収め、国民の期待に応えることが野球選手としての使命と考えられた。そのため、この時期に何人かの選手がアメリカと日本の球団にスカウトされたものの、入団テストを受けるチャンスすらもらえなかった。

ところが、80年代に入ると、台湾人にとっての国民的英雄像が変わった。その背景には蔣経国の総統就任とともに台湾社会に起こった大きな変化があった。1978年に第六代台湾総統（台湾3人目の総統）に就任した蔣経国は、父・蒋介石が夢見た「反攻大陸」の目標実現をほぼ不可能と判断し、台湾国内の基盤整備を進めることに専念した。

経済の面では、台湾本島・南北縦貫高速道路の開通、鉄道の電氣化工事、桃園中正国際空港の開港など、いわゆる「十大建設」の完工によって、台湾は大陸反攻に向けた復興基地（前身基地）から、アジア四昇龍（NIEs）の一つに生まれ変わり、めざましい成長を遂げた。後に「台湾の奇跡」と呼ばれる経済発展はこの時期に本格化した。¹

内政改革の面では、38年間にわたって施行された戒厳令が解除され、中台交流解禁や政党結成解禁、報道管制緩和(1987年)などの民主化措置がとられた。

中国との兩岸関係では、鄧小平が従来の武力による「台湾解放」政策から「平和的統一」に方針を転換して、三通（直接の通商、通航、通信）や四流（学術、文化、体育、工芸の交流）を呼びかけた。それに対して、台湾側でも従来の対中国政策を大転換して、香港とマカオへの渡航制限解除や、台湾住民による中国大陸への親族訪問を認めた。「自由中国（中華民国）対峙邪悪共匪（共産党のゲリラ）」の70年代と比べると、かなりの融合化が進み、中台関係の新たな時代が開かれた。1988年に第八代台湾総統（台湾4人目の総統）に就任した李登輝は、マスコミの大陸取材、電話の直接通信を解禁し、中国の芸術家やスポーツ選手らの台湾訪問を認め、直接の貿易航路も開設（開放）するなど、中国との交流をより一層拡大した。²

こうした経済発展及び兩岸関係の緩和とともに、国民的英雄像が国威発揚（国民の自信）や民族的自尊心を呼び起こす機能としての役割は小さくなり、共匪（共産党のゲリラ）に対抗する「反共英雄」としての役割も与えられなくなった。当然、「海外に行くのは不届き」という声もなくなり、日本プロ野球の「外国人選手枠」拡大と相まって、台湾人選手の日本への大量輸出が始まった。日本プロ野球の支配下選手に占める「外国人選手枠」は、1980年までの2人から、1981年から1995年までは3人に増やされ、96年からは人数制限が撤廃された。³

そのため、80年代はじめの高英傑（南海80-83）、李來發（南海82-83）を先駆けとして、日本プロ野球に入団する台湾人選手が相次いだ。中日ドラゴンズの抑え投手（守護神）として活躍した郭源治、外国人投手最多の117勝をあげた郭泰源（元西武）、入団以来5年連続二ケタ勝利をあげた莊勝雄（元ロッテ）、1988年に「呂ブーム」を巻き起こした呂明賜（元巨人）など、いわゆる「二郭一莊呂」から新しい国民的英雄時代の幕が開けた。日本人にとってのメジャーリーガーのイチローと松井秀喜や、サッカーの中田英寿と同じように、彼ら台湾人選手の海外での活躍ぶりは、野球人気の高い台湾でも国民的関心事であり、一種の国威発揚としての役割（機能）も果たした。

一方で、中国浙江省に生まれた王仕福を父親に持ち、自身は日本生まれの日本育ちで、後に国籍選択の必要に迫られて中華民国（台湾）を選び、蒋介石が治める台湾で国民的英雄となっていた王貞治は、1980年11月4日に引退記者会見を開き、21年間の現役生活に幕を閉じた。そして、三年間藤田元司監督の下で助監督を務め、二度のリーグ優勝に貢献したうえで、84年に巨人監督に就任した。巨人監督時代の王は中華民国の「国籍堅持」と「祖国英雄」のことが相変わらず頻繁に台湾メディアに取り上げられたが、もはや蒋介石の時代のような反共英雄でもなければ、台湾社会的価値のモデル・イメージでもなく、「二郭一莊呂」と並ぶ「旅日棒球明星（在日野球スター）」的な存在となった。

■「オリエントエクスプレス」郭泰源に「王巨人」に入って欲しいと願う台湾メディア

巨人退団後の王貞治は、NHKの解説者、世界少年野球推進財団の専務理事などを務めた。1990年に発足した台湾プロ野球リーグの顧問に就任し、始球式やオールスターゲームに招かれ、

王貞治カップ高校野球大会の開催などでも台湾に頻繁に足を運んだ。80年代以後の王貞治は台湾国民的英雄の輝きが色あせてきたものの、台湾社会に縁をもつ最大のヒーローであることに変わりはなく、メディアの報道には、海外に行く台湾人選手は王貞治が監督を務めている巨人に行つて欲しいとのムードが漂っていた。

王貞治の引退後、1984年のロサンゼルスオリンピックで台湾代表として158キロのストレートを投げ、「オリентエクスプレス」と呼ばれた郭泰源は、ロサンゼルスオリンピックが終わってから、MLB、西武ライオンズと読売ジャイアンツなど数球団の激しい争奪戦にさらされた。郭をめぐって争奪戦が繰り広げられている最中、当時のメディアは郭泰源がすでに西武から契約金を受け取ったので断れないと憶測しながら、「西武の選手への待遇は良くない」、「西武は日本で人気が低い球団」など、西武に不利な点ばかりを報じた。

《郭泰源がもし西武入りを決めたら、良い決断ではない》聯合報 1984,8,13

《日本華僑のほとんどは郭泰源の巨人入りに賛成する》聯合報 1984,8,18

それに加え、「同じ中国人なので巨人に行くべきだ」という声まででてきた：

《我が国に絶大な栄光をもたらした王貞治監督は、何年間も日本で生活してきたが今でも中華民国のパスポートを持っている。これは彼の愛国心の証である。今王巨人が不振に陥り、郭泰源の加入を必要とするこの時期に、同じ同胞として見捨てることができるのか？》

聯合報 1984,8,17

《王貞治は同じ中国人として、郭泰源を一流の投手に育てたい》聯合報 1984,8,11

確かに王貞治は郭にとって憧れの存在であり、郭の“王巨人”入りが実現すればメディアにとって格好の材料である。しかし、ただ民族感情的を西武の裏金の悪いイメージとつなぎ、“王巨人”に偏った内容の記事を載せるばかりで、巨人に入ったら出番があるか、西武という台湾人に馴染みのないチームはどういう球団なのか、といった郭泰源のための具体的な条件面についての検証を全く提示しなかったのが当時の台湾メディアであった。

1. 本田善彦『台湾總統列伝』中公新書 2004 P.101-P.103

2. 杉江弘充『知っていそうで知らない台湾』平凡社新書 2001 P.118-P.119 を参照にする

3. 『日本プロ野球外国人選手大鑑』ベースボールマガジン社 2002

4. 越智正典『輝けアジアの星！郭泰源』恒文社 1985 P.24

■ 王貞治と王建民：台湾社会における「世界の王」～

台湾メディアから湧き上がる“王建民待望論”「王さんの球団に行きたい」

先述したように、80年代に入ると王貞治は台湾国民的英雄の輝きが色あせてきたものの、台湾社会に縁をもつ最大のヒーローであることには変わりがない。それは30年経っても我々台湾人の「同胞」のような親近感が強いのである。そのため、王貞治が現役監督ではないのに、相変わらず台湾メディアは海外に行く選手に「王さんの球団」に入りたいとのムードを高めてきた。もっとも代表的な例が、台湾のエース王建民（ワン・チェンミン）である。

王貞治は巨人の監督を辞任した後はNHK野球解説者を務めた。1994年10月12日、福岡ダイエーホークスの監督に就任。2008年まで14年間にわたってホークス（ダイエー、ソフトバンク）の監督を務め、巨人時代を含めて2507試合の指揮をとり、1315勝（プロ野球歴代8位）1118敗74分けの成績を残した。監督退任後、引き続きソフトバンクの球団会長となった王貞治は、古巣の巨人よりもホークスのイメージが強いのである。

巨人からホークスの顔に。日本球界に於ける王のイメージの変化は、台湾の野球界にも影響を与えている。

2002年、台湾の台北市立天母棒球场で、王監督率いるダイエーホークスはオリックスと対戦（成績は1勝1敗）、日本プロ野球の公式戦としては戦後初となる試合を台湾で行った。2003年の福岡ダイエーホークス訪台親善試合も台湾の高雄で行なわれ、これらホークスの台湾遠征はいずれも王貞治と台湾球界の密接な関係なくしては成立できなかったと言っても言い過ぎではないだろう。それは「王＝ホークス」とのイメージが台湾に浸透する結果にも繋がった。その結果、王建民を始めとする台湾人選手に「王さんの球団＝ホークス」に行きたいというムードが高まってきた。

王建民は台湾の台南市出身で2000年にメジャーリーグのニューヨーク・ヤンキースとマイナー契約を交わした。2006年に大ブレイクした王は、アメリカン・リーグのトップタイ、アジア人投手最多記録となる19勝を挙げ、サイ・ヤング賞投票で2位につけた。2年連続で2007年にも19勝を挙げ、MLB通算62勝34敗、防御率4.37の成績を残した。台湾出身でメジャーリーグの開幕投手、二桁勝利投手など輝く実績を作り上げた選手は王建民が最初で、台湾社会では国民的英雄であり、王貞治に次ぐ「世界の王」という存在感を持つほどの大スターとなった。愛称は「建仔」。台湾のマスコミは王の名前の上に「台湾之光（台湾に光輝く者）」を冠することが多い。

王建民は2008年6月まで8勝を挙げる活躍を見せていたが、6月15日のヒューストン・アストロズ戦で走塁の際に右ひざをひねり、MRI検査の結果、靭帯の軽い捻挫と右足筋肉の部分断裂と診断され、故障者リストに入った。その後、ヤンキースからFAとなり、ワシントン・ナショナルズ、トロント・ブルージェイズなどに移籍したが、なかなか、かつての輝きを取り戻すことができず、2013年以降

メジャーで6試合しか登板できなかった。2013年オフにFAになってからメジャーではプレーしていない。(まだ所属先が決まっていない。)

王建民は2013年のWBCで、2004年アテネ五輪以来ほぼ10年ぶりに台湾代表のユニフォームを着た。大勢のスカウトが集まるWBCで良いピッチングを披露出来れば、絶好のアピールになり、メジャー復帰の可能性がある契約を結ぶことができるかもしれないとの事情があったからだ。初めてのWBC舞台では、王建民はヤンキースで2年連続19勝を挙げた実力を存分に発揮し、台湾代表のエースとして、第1ラウンドのオーストラリア戦、第2ラウンドの日本戦でいずれも6回無失点の好投。台湾代表がWBCで悲願の「8強」入りを達成するのに貢献した最大のキーマンと言えるだろう。

WBC終了後に、王建民の好成績は注目されており、日本のプロ野球界からも声がかかるのではとの話も出ていた。また、監督や他のメンバーがすぐに(10日に)台湾に戻ったのに対して王は帰国を1日延期したことから、台湾マスコミは王と日本球団が接触した可能性についても報じている。^[1]

同年の11月に台湾中央社(共同通信に相当)は「ソフトバンクが王建民獲得の意向 王貞治も説得」と報じた。

「プロ野球の福岡ソフトバンクホークスが王建民の獲得を目指していることがわかった。これは中央社の独自取材によって明らかになったもので、同球団会長の王貞治氏が説得にあたっているとされているが、王は米大リーグでのプレーを希望しているとして、契約にはいたっていない。^[2] 王のマネージメント会社代表の張家銘氏(代理人)は中央社の取材に対し、日本プロ野球チームは『ずっと王に興味を持っている』としながら、ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)後と、メジャーリーグ、トロント・ブルージェイズで2度にわたる戦力外通告時にいずれも「複数の球団」が獲得の意向を表明したという。^[3]

ただ、ソフトバンクホークスが王貞治氏を通じて王建民と接触したかについて張氏は回答をひかえ、『建民はアメリカでプレーを続けることを希望しており、こちらからは日本の球団と話し合うことはない』との立場を改めて表明した。」(2013/11/01 台湾中央社)^[4]

王建民は「WBC終了後に一日遅れで帰国したのは日本の球団と接触したから」との報道について、「帰国予定延期は観光目的だ。よくわからない。エージェントに一任しており、エージェント次第」と答えた。また、メジャーリーグ復帰が目標かとの質問にも、「今の目標はメジャーリーグ復帰」とコメントした。それにもかかわらず、30年前の郭泰源の時にされた報道と同じで、台湾人選手に「王さんの球団＝ホークス」に行って欲しいという意図が見え隠れする台湾メディアである。

■ 歴史に残る一戦での王建民の貢献－これからの台湾代表に自信を付けた 6 回零封

第 3 回ワールド・ベースボール・クラシック（2013 World Baseball Classic、W B C）第 2 ラウンドの日本対台湾戦は、3 月 8 日に東京ドームで行われた。

日本は、台湾の先発投手・王建民を打ち崩せず、7 回まで 0 - 2 とリードされたが、8 回と 9 回に台湾の後続投手を攻めて、2 度同点に追いつき、延長戦に持ち込むと、最後は井端弘和の決勝タイムリーで 4 - 3 の大激戦を制した。総力戦で負けた台湾は、第 2 ラウンドで敗退する結果となったが、この激闘は日台それぞれに大きな意味を持った試合だった。

もちろん、「あの試合で勝てなければ、台湾はいつ日本に勝つのか？ 当分、日本を倒すチャンスはないだろう」と思う台湾野球ファンは多いだろう。しかし、その試合内容は今後の日本戦に向けて「勝てないことはない」という自信を台湾代表の選手たちに持たせる一戦だったのではないかと考えられる。

試合後に、台湾代表の謝長亨監督は試合を振り返って次のようにコメントしている。[\[1\]](#)

「選手たちは素晴らしいプレーをしてくれました。おつかれさまと言いたいです。こうした国際試合で日本というレベルの高いチームを相手にして、少しは近づけたかなという感じです。敗れましたが、大きな重圧を相手に与えられたのではと思います。今後も国際試合でこのような粘り強い試合をみせて欲しいです。今日の結果は残念でしたが、こういう国際舞台で粘り強く戦い続け、いつの日か勝てるようになることを願っています」

この数年間の台湾対日本の対戦成績から見ると、台湾代表にとって日本戦の壁はあまりにも高い。オールプロの日本代表を相手に、2003年のアジア予選以来、勝ち星なし。第 1 回 W B C（2006年）でも 3 対 14 の惨敗を喫し、10 年間“カモ”にされ続けてきた。

しかし、台湾代表の謝長亨監督が「こうした国際試合で日本というレベルの高いチームを相手にして、少しは近づけたかなという感じです。」とコメントしたとおり、なかなか破れなかった天敵・日本と互角に渡り合ったことで、台湾代表の選手たちは大きな自信を得たはずだ。

これまでの台湾代表は、最初から日本戦をあきらめていた。オリンピック予選、W B C 1 次ラウンドなど、上位 2 カ国が得られる本戦への出場キップ 2 枚のうち、残り 1 枚を獲得することに目標を置き、打倒韓国で挑んでいたからだ。今回の日本戦で得た自信は、今後の方針を転換するきっかけとなるかもしれない。

謝長亨監督は「最後に出てきた我々の投手が力を発揮できなかった」と敗因を分析している。しかし、後ろに控えていた投手の力を考えた時、王建民がいなければここまでの試合展開に持ち込めたのかとも